

あらくかまあと
東金子窯跡群(新久窯跡) (入間市)





公園部分に説明板がある



新久窯跡

東金子窯跡群の一つであり、九世紀中頃に再建された武蔵国分寺塔に用いられたとされる瓦を焼いた窯の跡である。

八世紀前半、聖武天皇の勅諭によって建立された武蔵国分寺塔は、享和二年（八三五年）の高雷によって焼失してしまった。そのため、前美濃郡（香良郡）大徳王生古志福正が同塔再建を願い出て、これが許された。そのとき再建に要する造瓦の中心となったのが、この新久窯跡であるとされている。

昭和三十八、四十四年に発掘調査が行われた結果、その範囲は東西四五〇メートル、南北二五〇メートルで瓦窯跡三基、須弥塔基跡四基、工房跡一基、及び竪穴住居跡一基、が発見された。窯は半地下式の登窯構造をもつものが多く、全長三〜一〇メートルほどである。

出土遺物として瓦のほか陶磁、酒器磁等が多数出土され、瓦須磨路には、多摩、入道等古代の地名が記されたものもある。

入
場
料
無
料



新久窯跡

あらくかまあと

東金子窯跡群の一つであり、九世紀中頃に再建された武蔵国分寺塔に用いられたとされる瓦を焼いた窯の跡である。

八世紀前半、聖武天皇の勅願ちくがんによって建立された武蔵国分寺塔は、承和二年（八三五年）の落雷によって焼失してしまった。そのため、前男衾郡まへのあきぐん（寄居町）大領王生吉志福正だいらりょうのみぶのまさしふくせいが同塔再建を願い出て、これが許された。そのとき再建に要する造瓦の中心となったのが、この新久窯跡であるとされている。

昭和三十八、四十四年に発掘調査が行われた結果、その範囲は東西四五〇メートル、南北二五〇メートルで瓦窯跡三基、須恵器窯跡四基、工房跡一基、及び竪穴住居跡一基、が発見された。窯は半地下式の登窯構造をもつものが多く、全長三〜一〇メートルほどである。

出土遺物として瓦のほか陶硯とうげん、須恵器等が多数出土され、瓦、須恵器には、多摩、入間等古代の郡名が記録されたものもある。



和光堂
和光堂は、和光寺の境内にあり、和光寺の歴史を伝えるために設置された。和光寺は、和光寺の歴史を伝えるために設置された。和光寺の歴史を伝えるために設置された。和光寺の歴史を伝えるために設置された。

和光寺
和光寺の歴史を伝えるために設置された。和光寺の歴史を伝えるために設置された。和光寺の歴史を伝えるために設置された。和光寺の歴史を伝えるために設置された。

新久窯跡

市指定史跡

指定年月日 昭和五十三年十二月二十一日

新久窯跡は、加治丘陵に広がる東金子窯跡群の一つで昭和三十八年、昭和四十四年に発掘調査が行われた。新久窯跡で製作された瓦は武蔵国分寺や国分尼寺などから出土しているが、その多くは武蔵国分寺七重塔跡から出土している。

この七重塔は『続日本後紀』によると承和二年（八三五年）に落雷により焼失し、承和十二年に前男衾郡（寄居町周辺）大領、壬生吉志福正が再建を朝廷に願い出て許されたとされている。この七重塔の再建の瓦を製造したのがこの窯跡である。

またこの窯跡が承和十二年に操業していたことで、



ここより出土した須恵器の坏が、九世紀中頃という年代を決定する重要な基準となっている。

平成四年十二月一日



入間市教育委員会
入間市文化財保護審議委員会

市指定文化財(史跡・昭和53年12月21日)

二基の半地下式無階無段登窯の遺跡は、昭和38年・昭和44年の2回にわたり立正大学教授・坂詰秀一氏を団長とする調査団によって発掘調査された東金子窯跡群に属するものである。9世紀中頃、武蔵国分寺の塔再建に必要な瓦を生産した



窯跡公園

龍圓寺の裏手は9世紀に武蔵国分寺再建の際、造瓦の中心になった新久窯跡が公園となっている
瓦窯は半地下式・登り窯が三基あったことが昭和の発掘調査で確かめられている





写真6: 入間台遺跡公園



- 835(承和(じょうわ)2)年に落雷により焼失した武蔵国分寺(現・東京都国分寺市)の七重塔を再建するための瓦を焼いた窯があった。
- 窯があった位置に杵が立てられている。

インターネットより

対面はお寺の墓地となっている



左は調査隊の車





